

『篁物語』における三の君結婚というモチーフ

— 『世説新語』賢媛伝〈許允婦〉の引用からみた人物造型の試みとして—

中村祥子*

要旨

右大臣家の三の君との婚姻のエピソードを、『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉の世界を持ちこんで読むことで、従来断絶されているといわれる前半部と後半部が統一的に読める。また統一的にみることによって物語文学における人物造型の試みをみることができる。

テキストにみられる結婚のエピソードは、男の才学への承認と妻による男の好色^{オスキ}への批判を行ったものである。加えて結婚によって才学への承認がなされている。また結末にみられる社会的に栄達した男の姿は、前半部において身分の低さが障害になった恋への補償として存在する。同時に、篁の妹の恋を妻が承認することによって、男が現実世界に回帰出来たことを現している。よって、この結婚は、男を流離から現実世界へ引き戻す意味も持つ。

また、漢文芸のテキストが物語のテキストに織り込まれることによって篁の好色性が示されていることには注目すべきであろう。物語において好色性をもつ人物を造型するために、和歌を中心としたこれまでの方法を用いず、漢文芸の伝という型を用いた物語生成の試みを見ることができる点で興味ぶかい作品であるといえる。

キーワード：世説新語 婚姻のエピソード 人物造型の試み

好色性 漢文伝

*輔仁大学日本語文学科 助教授

『篁物語』當中「三之君結婚」之主題 —試從『世說新語』賢媛第十九〈許允婦〉探討人物造型

中村祥子*

摘要

以『世說新語』賢媛傳〈許允婦〉一文中人物造型角度，來探討右大臣家中三之君的婚姻逸聞，可以發現從前學界認為文脈不合之前半部，與後半部內容得以統一。此外藉由文章前後之連貫，得以從中試著看出物語文學中之人物造型。

『世說新語』一書中之結婚逸聞為「許允之妻阮氏認同許允才學，與阮氏對許允以貌取人之風流態度提出批評」。（『篁物語』一書中之結婚逸聞為「小野篁之妻認同篁之才學，與其妻對小野篁之風流態度提出批評」。）輔以藉由結婚一事，主角才學方能為人認同。此外文末所描寫，許允（小野篁）飛黃騰達於官場之描述，可對前半部因身份低微造成戀情阻礙之情形有補償之作用。同時，由於妻子承認小野篁與其異母之妹之間的戀情。小野篁得以回到現實世界。因此，此「結婚」意謂主角自流離生活中回復現實世界。

此外，將漢文學『世說新語』導入『篁物語』中，暗示小野篁之風流部分也應作為閱讀重點。為了探究物語當中具風流特性之人物，本作品可以說是「不使用以往『以和歌為中心的方式』進行人物描述，而是嘗試以漢文學之人物傳記編寫物語，就此觀點而言，『篁物語』可謂為一部令人深感興趣的文學作品。

關鍵詞: 世說新語 婚姻逸聞 人物造型 風流特性

漢文學之人物傳記

*輔仁大學日本語文學系 副教授

**A motif of marriage with SAN-NO-KIMI in TAKAMURA- MONOGATARI
—As a trial of character creation which from allusion of “SESETU
SHINGO”**

NAKAMURA, Shoko*

Abstract

The structure of this text, TAKAMURA MONOGATARI, was comprehended that there is not jointed two part. But we pay attention to that “SESETUSHINGO” make an allusion to this episode of the marriage, we will able to find the integral structure of this text . In addition, there is a trial of character creation in MONOGATARI.

This episode of marriage has double meaning. One meaning is blaming to “SUKI” behavior (a kind of lustful behavior) of TAKAMURA by the wife. And another one is an appreciation of the ability of TAKAMURA by UDAIJIN(a Cabinet minister). And it approves not only the happy ending of TAKAMUAR-MONOGATARI is compensation for TAKAMURA’s unrequited love that obstacle in the first half region, but also the wife,SAN-NO-KIMI, accepts the love of the younger sister of TAKAMURA and she let TAKA-MURA recur the reality world. Therefore, this marriage has the meaning to return TA- KAMURA from wandering to the reality world.

In addition, we should pay attention to that the sensual nature of TAKAMURA is shown by a text of the classical Chinese being incorporated in the text of the story. It may be said that it is the work which is interesting at the point that can watch a trial of the story generation that it was used a basic form called KANBUNDEN(the biography of the classical Chinese)for without using the from to this mainly on WAKA to do creation of a person having “SUKI” characteristics in a MONOGATARI.

*Associate Professor, Department of Japanese Literature, Fu Jen Catholic University

Keywords : “SESETU SHINGO” , episode of the marriage ,character creation,
KANBUNDEN(the biography of the classical Chinese)
“SUKI” characteristics

『篁物語』における三の君結婚というモチーフ

— 『世説新語』賢媛伝〈許允婦〉の引用からみた人物造型の試みとして—

中村祥子

『篁物語』における漢籍の影響が、其作品の発想、構成に関わるものであることについては、すでに多くの指摘がある¹。作者は巧みに、実在した篁の事跡、伝記と説話などにみえる「篁」の姿を組み合わせていく。

以前、『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉と『篁物語』後半部の学生篁と右大臣三の君との婚礼の夜のエピソードが類似していることを指摘したことがある。その稿において、『篁物語』と『世説新語』の当該部分に書承関係があるのではないかということ、『篁物語』と〈許允婦〉を繋ぐものとして『本朝文粹』卷七書状「奉_二右大臣_一」があるであろうこと、そして「許允」という直情径行で、そのために権力者から疎まれた人物の姿が篁と重なったのではないかということ述べた。また、エピソードの中にみられる「賢」婦人の存在こそが、篁を現実世界へと導くものであるだろうという指摘を行なった²。

物語前半部において妹を失い「妻にもよらでひとりなむありける」と世の中と隔絶して生きていた篁が、再び動きはじめるのは「書おもしろく作り」右大臣に娘を請う姿によってである。後半部右大臣家の娘と学生の結婚という物語の発想及び素材が『本朝文

¹阿部俊子氏、石原昭平氏、芳賀繁子氏等の指摘による。

²拙稿（1995.6）「『篁物語』第二部の発想についての私見—『世説新語』賢媛伝との関わり—」 p 17～p 26 『日本語日本文学』21号 p 17～p 26

粹』卷七書状「奉_レ右大臣_一」からきていることは、『篁物語』の研究史上も早くから指摘されている。その書状を次に挙げる。

学生小野篁誠惶誠恐謹言

竊以、仁山受_レ塵、滔漢之勢寔_レ峙。智水容_レ露。浴日之潤良流。是以尼父結_レ好於縲紲之生_一。呂公附_レ嬪於馭亭之士_一。剛柔之位。不_レ可_レ得失_一。配偶之道、其来尚矣。傳承賢第十二娘。四徳無_レ雙、六行不_レ闕。所謂君子之好仇。良人之高媛者也。篁才非_レ馬卿_一。彈_レ琴未_レ能。身非_レ鳳史_一。吹_レ簫猶拙。獨對_レ寒窗_一。恨_レ月日之易_レ過。孤臥_レ冷席_一。歎_レ長夜之不_レ曙。幸願蒙_レ府君之恩許_一。共_レ同穴偕老之義_一。不_レ堪_レ宵蛾拂_レ燭之迷_一。敢切_レ朝蕾向_レ曦之務_一。篁誠惶誠恐謹言。

年月日³

この申し文は、学生篁が時の右大臣に娘を望んだものである。妻に望む十二娘の婦徳を賞賛し、その娘を妻にと願う自分の非才を嘆いてみせるものである。十二娘という大臣の娘の四徳は素晴らしく、婦女として必要な行いであるとされる六行をすべて備えた才媛であること、それに比して自分にはとりたてての才能もないものであることが示され、不釣り合いな結婚の申し出であることが読み取れる申し文であるといえる。ここではこの申し文の文学的技法や修辭的な問題は別にして、篁が右大臣に娘を請うという内容が『篁物語』の後半部の発想になっていることをまず確認しておく。この書状からは次のようなエピソードが発想され、『篁物語』の後半部が構成されているといえよう。物語における〈篁〉は積極的に右大臣の娘との結婚を望みながら、婚礼の当日に娘の部屋から出て行こうとし、破談にしようとする。このような婚姻の危機を右大臣の娘が咄嗟の機転で救うというのが後半部の内容なのだが、この右大臣の娘・三の君の機転の部分には『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉（後述）か

³ 柿村重松氏（1968.9）『本朝文粹評釈』富山房本文によった。宵の部分は「流布本作蓋誤」と校訂されている。この本文に従う。

らの引用があると考えられる。

『篁物語』は『世説新語』に取材をしていることは疑いない。〈篁の物語〉を語るのに、『世説新語』〈許允婦〉の世界を持ちこみ、篁という人物への独自の解釈や新しい世界を作っているといえる。その〈篁〉への独自の解釈や理解を語るのが、『世説新語』の引用によって創り出された物語の世界であるといえよう。この『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉の世界を読み解くことで、『篁物語』における〈篁〉という人物への解釈や理解が読みとれるであろうし、『篁物語』の世界が開けてくるだろう。テキストにおいて、言葉として語られなかったり、筆記されなかった空白が、引用によって読み解く手がかりを与えられることになる。

『篁物語』と『世説新語』を補完的に読むことで、テキストの新しい姿をみることが出来るだろう。さらにはテキストからプレテキストを読みなおすという読みへも繋がるものであろうが、ここでは、『世説新語』を通して『篁物語』を読むことにより、結婚の成立した理由と男像に付与される男の性状について考察を行なう。

1. 『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉と『篁物語』

まず、引用関係が指摘されるテキストのそれぞれの部分を確認する。

『篁物語』後半部は、篁の求婚から始まる。妹を失い「妻にもよらで」いた篁は、時の右大臣へ投献を行なって、右大臣の娘との結婚を願う。右大臣には三人の娘がいたが、上の二人は、篁との縁談を打診されただけで「怨ず」「泣きいる」という強い拒絶を示し、三番目の娘、三の君だけは「ともかくも、おほせごとにもこそ、従はめ」と受容的な態度で篁との結婚を受け入れたため、篁は右大臣家に迎えられることとなる。そして、婚礼の夜、右大臣家を訪れた男は次のような行動をおこす。

御消息ありければ、いと悲しう、椽の¹、やれ困じたる着て、

しりゐたる²沓はきて、ふくめる文のち^{本まゝ}³取りて、来にけり。
 帳のうちに入りて、まづ、この文巻を奉れば、取り給はねば、
 篋さしていけば、この君、皮の帯をとりて引きとめ給へば、と
 まり給ひにけり。これをかいまみて、父おとゞ、見たまひて、
 「いとかしこくしつ」と喜びたまふ。「出でて去なまし。いか
 に人聞き、やさしからまし。いとかしこきことなり」と喜びた
 まふ。(P 35)

1 つるはみのきぬの 2 てりいたるくつ 3 ふみのまく

男の姿はみすばらしい。婚礼のために装束を整えるほどの心理的
 余裕がなかったのであろうか、あるいは、装束を整える経済的な能
 力などなく貧しい身なりしか出来ないが、自分の才能はかの投献に
 示されているだろうとの自負を示したつもりなのか、「椽のやれ困
 じたる着て」、「しりゐたる沓」を履いた姿である。「しりゐたる」
 は意味が明確ではない。書陵部本本文では「てりいたる」となっ
 ており、これも意味不詳だが、沓の状態を表していると思われるので、
 かかとや底がすり減った沓ぐらいの意味ととれよう。このような男
 の姿の描写の直前には「いと悲しう」という評言がある。これは、
 (イ) 語り手の篋の服装に対する評言ととる。『令義解』により身
 分の低いものの服装とする。篋の困窮をしめすものか。
 (ロ) 篋の心理と取る。御消息ありければ、いと悲しうと続けて読
 み、「消息があつたので、妹のことを思い出して悲しく感じ
 て」と解する。「椽」色の「やれこうじ」た喪服を着てきた
 といえる。

という、二つの解釈ができるものである。

この粗末な身なりをした篋の造型には、『宇津保物語』の学生藤
 英の姿が彷彿とされる⁴。テキストの中の時間経過を考えると、当

⁴篋と藤英の造型について、造型の類似、成立時期、書承関係、社会環境など
 『宇津保物語』との関わりを指摘したものに、阿部俊子氏(1967.7)『歌物語

該の男の装束の描写は、前半部結末

三年すぎでは、夢にも、たしかに¹見えざりけり。なを悲しかりければ、はじめのごとしてなん、まかせたりける。妻にも寄らで、ひとりなん、ありける。(p 35)

1 たしかには

に示されているように、すでに妹の死後三年という時期が経過している時点でのものであるので、心中に妹の死への悲しみを抱いていたとしても、喪服とは考えにくい。よって、篁の服装は困窮しながら、なお学問を志す姿を描写したととりたいたいと思う。(イ)(ロ)のどちらにしても篁が婚礼に適切ではない服装でやってきたことにかわりはないのだが、やはりこの篁の姿には『宇津保物語』の藤英のように「財政的に豊かな、人脈にも恵まれた、本人の力より金力縁者を頼みとする学生に対し、それら一切に無縁で、しかも学識豊かな真の学生」⁵として右大臣家に現れてきたと読めるものである。同時にこの姿は、右大臣家に対する挑戦と取れるものである。右大臣の投献に示した学才が正当に評価されるかどうか、また、評価したことの表現として右大臣家において学生が女婿として承認されるかどうか。すなわち、右大臣が才学そのものを承認するのかという一学生である男からの挑戦が、男の身なりという表象で示されているといえよう。

『宇津保物語』の藤英の場合も、篁と同じく学生が権力者に認められ世に出ることが出来る。藤英の才学は突出したものがあつたのだが、その才も正当に用いられず、身よりもなく貧困にあえぎ、不

とその周辺』P 9 1 4～P 9 2 2・P 9 6 1～P 9 6 8 風間書房、津本信博氏 (1977.5) 『『篁物語』の成立をめぐる』P 1 3 2～P 1 4 0 『篁物語新講』武蔵野書院がある。

⁵平野由紀子氏 (1988.3) P 1 4 8 『小野篁集全釈』風間書房

遇であった。が、あるとき右大将源正頼に才を認められ、装束を与えられる（「祭の使」）。その後描かれる藤英の姿は、大内記になり、多くの権力者から聲に望まれている（「菊の宴」）。

学生の一つの形象として、権力者に見出され出世するというものがあるようだが、ここには能力はあるものの不遇な学生が権力者によってその才学を認められるところとなり、正当な評価を得て栄達するという構造を見ることができる。『篁物語』も右大臣が篁の才の承認をすることで、栄達していくルートに乗るという構造に沿っている。

ともあれ、篁は右大臣家の人々に不安な思いを抱かせながら、娘の部屋に入って行くのだが、ここで本稿冒頭で示したような小さな事件がおこる。部屋に入った篁は、まず持参した文巻⁶を三の君に「奉る」。だが、三の君は受け取らない。すると篁は部屋を出て行こうとする。三の君にすれば、文巻を差し出した篁の意図が分からなかっただけの小さな齟齬に過ぎないのだろうが、篁にとっては部屋を出て破談にするほどの出来事となる。三の君は篁の意図が分からないなりに、なにかを感じたのであろう。機転をきかせ、篁の帯を捉えて、部屋に引き留め、結婚を成立させる。この三の君の姿をみた右大臣は、「かしこくしつ」と娘の機転をほめ、もし篁が出ていったならば、「いかに人聞き、やさしからまし」と、格の違う結婚を推し進めたことに対し世間にどんな批判を受けたか分からなかったと安堵する。このように篁と三の君の不協和音を示し、結婚生活が始まる。これが『篁物語』の当該部分である。

ここで注意しておきたいのは、この「ふくめる文のちゝとりて」右大臣家を訪れ、「文巻」を三君に渡そうとした篁の行動によって、世に出るための藤英に対する承認と篁への承認の構造には差異が生じていることである。確かに、学生ならば文巻を持っていたとして

⁶ この部分「書のちゝ」とあり、つぎに「文巻」とあって不審だが、書帙の中から一冊取り出したものと理解できるか。

も不自然なことではあるまい。だが、篁の場合は、私的な贈り物として三の君に与える文巻として持参している。その文巻が三の君によって受領されなかったことが、帳を出て行く原因となる。篁がいかなる意図の元に文巻を渡すという行動をしたのか、不明瞭なままに退出しようとするのである。

この「篁の意図」を読み解くためには、才の正当な評価による栄達を志向するために、襜褕を身にまとった学生である男像が造型されたのだと理解するのでは疑問がのこる。疑問は二つある。一つは「ふくめる文のちゝ」という、言うならば使いこんでぶくぶくになった文を婚礼の夜に持ってきたのかということ、もうひとつは、文をなぜ三の君に渡そうとしたのか、また、受け取らなかったことが、なぜ篁にとって帳を出て行くほどの問題になるのか、ということである。

一つ目に挙げた使い込んだ書を婚礼に持ってきた理由については、篁が学生であり、持参したのが漢籍であったことに意味を求めるべきである。初めの恋は「しづのお^(を)だまき」、であるために成就しなかった。「しづのお^(を)だまき」つまり身分が低い学生が、律令制と摂関制の揺らぎの中で自己を証明できるもの、それは漢学の才しかない。婚礼に持参した「ふくめる書^(を)のちゝ」とは、社会的身分のない一学生が、自分の価値を証明するためのものと考えるのが妥当であろう。加えて、前半部において、妹への懸想の仕方が漢籍の教授のなかで角筆を用いるという方法であったことを想起すれば、この文のもう一つの性格も自ずと規定することができる。この文は愛情の表現であったのだ。ことに「ふくめる」という状態からは、篁が使い込んだものであるということが明示、強調され、文のなかには時間的経過が暗示されているともいえる。暗示されている時間的経過とは、男が学問に打ち込んだ時間であり、かつ妹との時間である。とすると、婚礼の日に、三の君に対して示された文巻というのは、妹との記憶を象徴するものと見ることが出来、またそれを三の君に

示すというのは、変形した求愛の行動であるといえよう。文巻を差し出すという行為が、三の君に対する直接的な愛情とまでは言えないにしても、妹一人に対して愛情を持ち得る、精神性の提示であるといえよう。後述するが、一人の人間を思いつづける精神性の性質がどのようなものであったかは、妹の魂を巡って篁と三の君が、死別の後になお、お互いに生死を超えて引き合う人間関係の是非について争う場面に端的に表されている。「ふくめる文のちゝ」の文巻とは、男が妹に対して持った、精神性の高さを象徴するものであったというべきではあるまいか。

文巻が以上のように規定できるなら、三の君に「文巻」を差し出す行動は、篁自らの才と精神を差し出したことと同等になる。この行為は三の君によって自分の才と精神の二つが共に受け入れられるか否かを試したものだといえよう。よって、三の君の受諾拒否とは男が才と精神性の承認が得られないことを示すものとなり、そのために篁は帳の外に出ようとするのである。もっとも篁の経験を知らなかったであろう三の君の立場に立てば、その意図を汲むことは困難なことだ。だが、三の君の状況に関わらず、「取り給は」ないという対応は、篁にとっては否定的な行為であり、受領拒否の後に部屋を出ていこうとする篁の行動は、自己の才能に対する自負と見ることが出来よう。世に用いられるべき篁の学才を承認し、彼の自己の精神性への自負の自由な活用を承認した上で、自分の価値を認める人物を希求している、篁自身の意志の主張だといえる。

この後、篁の意図が分からないままではあるが、三の君の機転によって婚姻は成立する。三の君の行動の後に見られる、右大臣の「出でて去なまし。いかに人聞き、やさしからまし」という言葉からも右大臣家が学生を婿がねにしたことがいかに社会的な常識を逸脱したことであったのかが窺え、同時に、学生が家の繁栄に有利な条件ではなかった時代であることが象徴されている。その時代に学生を迎え入れるということは、逆に右大臣がいかに高く篁の才学を承認したかを示すものにほかならない。投献という行為からは、才

学の誇示が強く読み取れるのだが、篁がおこなった投献の背後には、才とともに精神性が提示されているといえまいか。精神性とは書の背景に篁が込めていた思いという意味である。篁には才学と共に承認を得たかったものがあつたといえる。それは文巻に象徴される精神性であつたのではないか。篁の精神性への承認はまだ得られているとはいえないが、この結婚の成立により、右大臣家の中で篁の才が承認され、また、形式的ではあるが、妹一人に対して思いを持ちつづけるほどの精神性の高さが承認されたようにも見える。

次に『篁物語』が引用したと考えられる『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉の部分を以下に引く。

許允婦、是阮衛尉女、徳如妹。奇醜。交礼竟、允無_レ復入理_一、家人以深為_レ憂。會允有_二客至_一。婦令_二婢視_レ之、還答曰、是垣郎。垣郎者、垣範也。婦云、無_レ憂、垣必勸_レ入。垣果語_レ許云、阮家既嫁_二醜女_一與_レ卿、故_レ富有_レ意。卿宜_レ察_レ之。許便回入_レ内、既見婦、即欲_レ出。婦料_二其此出、無_二復入理_一、便捉_レ裾停_レ之。許因謂曰、婦有_二四徳_一。卿有_二其幾_一。婦曰、新婦所_レ乏唯容爾。然士有_二百行_一、君有_レ幾。許云、皆備。婦曰、夫百行以徳為_レ首、君好_レ色不_レ好_レ徳。何謂_二皆備_一。允有_二慚色_一、逐相敬重。

阮衛尉の娘、徳如の妹は、醜い娘であつた。その容姿の醜さの為、婚礼の夜、新郎の許允から疎まれる。婚礼が終つても部屋に入らない許允に、家族のものは愁いたが、允の元を訪れた友人、桓範の戒めにより、新婦の部屋に入ることになる。一旦は部屋に入った許允だったが、やはり新婦の容貌の醜さを嫌い出て行こうとする。新婦は一度出ていってしまったら、二度と戻ってくることはないと考え、すかさず許允の裾を捉えて引きとどめる。引き留められた許允は、許允婦に四つの婦徳の内何が幾つ備わっているか聞き、許允婦は欠けているものは「容」だけだと答える。そして許允婦は許允に、士行の百行の幾つあるかと問い掛け、すべてあるとの許允の答えに

対し、自分の容姿を見て出て行こうとしたのは「色」好んだことだと指摘する。自ら新婦に対して君子に必要な「百行」すべてを持つといいながら、その新婦に一番大切な「徳」を好まず「色」を好んだといわれた許允は慚じ、以後、新婦を大切に思うようになった、という。以上が許允婦婚礼の夜の出来事である。

『世説物語』「賢媛伝」は、字のとおり、賢明な女の物語であり、女の豪胆さや状況判断の確かさ、鋭い批評をする女の姿が集め描かれているものである。「賢媛伝」に取り上げられた女性の逸話のなかには、女が適切な判断や批評を夫や子供に与える話がある。夫や子供は妻の判断や批評によって、難を逃れたり、反省したり進退を決めたりする。『世説新語』〈許允婦〉は、ここに引いた当該の部分を含め三話が採られているが、それらは、許允婦の批評や判断によって、夫や子供が難を逃れるものである。

この話に見られる、新婦許允婦が夫にその醜さを嫌われ、婚礼の夜に、部屋を出て行こうとした夫の着物の裾を捉えて部屋に留めたという逸話は、『篁物語』の三の君との婚礼の夜の物語と類似する。『篁物語』においても新郎の衣服の一部を掴んで引きとめており、『篁物語』においては、父右大臣が娘の行為を「かしこくしつ」「かしこきことなり」という言葉で評している。これは「賢媛伝」の「賢」の繰り返しであろうし、三の君が「賢婦」であることを示すものである。そして、語り手による「賢媛伝」の世界への誘導でもある。

この婚礼の夜に新婦が新郎の衣服を捉えて引きとめる設定と、父親による「賢」いう評言からみて、『篁物語』に『世説新語』を引用しているとみることに問題ないだろう。

では、この部分に、引用されている『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉の世界を持ちこんで読むと、どのような世界が開けてくるだろうか。

許允婦の結婚を語る部分には、許允が友人の勧めにしたがって部屋に入るといったようなエピソードが挿入されている。許允婦の容貌

の醜さを嫌い、部屋に入ろうとしない許允のもとに、桓範という友人が訪ねてくる。許允婦は婢に訪問者を確認させ、客人が桓範だと知ると、「憂ふるなかれ、垣必ず入るを勧めん」という。桓範が許允を諫め、自分の部屋に入るように言ってくれるだろうから、心配しなくてもよい、というのである。果たして、桓範は「阮家既に醜女を嫁して卿にあたふ。故より富に意あるべし。卿宜しく之を察すべし」と允を諫める。醜い娘を与えたのは、阮家には何か意図があったのであろう、その阮家の意図を汲み取らなければいけない、という桓範による諫めなのだが、諫められた許允の立場から読めば、結婚が円満に成立するためには、阮家が醜い許允婦と結婚させようとした意図を、許允はきちんと理解すべきことを要求されている。結果、許允は許允婦の賢さを知ることにより、「遂相敬重」するようになる。このお互いに敬愛するようになった幸福な結末は、許允が阮家の「意ある」ところを「宜しく之を察す」ことによって得られたものにほかならない。とすると、この結婚の成立の条件として、結婚を勧めたものの意図が汲み取れるかどうか大きな要素となっていることがわかる。

ここに指摘した「結婚を勧めたものの意図を汲み取る」ことが結婚成立の要素であることを、『篁物語』の婚礼の夜の齟齬に当てはめて考えて見ると以下に述べるようなことが読めてくる。三の君が出て行こうとした篁を引きとめ結婚を成立させたのは、父右大臣の意図を汲み取る娘の察しのよさによるものである。右大臣である父親が身分の釣り合わない学生風情との縁談を奨めるのはなんらかの意図があるはずだ、父親の意図を汲まなければという娘の反応である。右大臣家の娘が学生風情に袖にされたというのでは面子に関わるという読みも展開できるだろうが、三の君の行動は父右大臣の「意ある」ところを汲み取る行為だと読むべきだろう。

そもそも、篁と右大臣家の娘の縁組は、篁が右大臣に娘を乞う旨の投献をしたことがきっかけとなっている。テキストには書かれな

いが、発想の基底にあるのは『本朝文粹』の書状である。物語の中でも、この書状の内容は想起されたであろうから、物語の右大臣が娘との結婚の申し出を受け入れたのは篁の文の中に見た才能を評価したからと強く意識されて読まれるはずである。父右大臣が篁の才を認め、娘達に対して篁との結婚を打診した時、三の君だけが「ともかくも、おほせごとにこそ、従はめ」と言って篁との縁談を受けた。この経緯をふまえて結婚の夜の出来事を読めば、娘が篁を引きとめたという行動は、娘が父親の意を汲み取っている行動としか読めない。三の君は、文巻を差し出した篁の意図を理解してはいないのである。婚礼の夜、父親が娘の行動を垣間見ているのは、娘が父親の意図に沿って結婚してくれるかどうか不安に思っていたための行動だろう。しかも、自らが見込んだ男の姿は、みすぼらしく不安を掻き立てるものである。娘が機転を利かせ、うまく篁との結婚を成立させてくれればよいが、そうでなければ学生風情に袖にされた右大臣家は世間の嘲笑の対象であると左大臣の心中は穏やかではなかったに違いない。そのような危機的状況の中、父親の意を察して機転を利かせたことに対する賞賛が、三の君に対する「かしこくしつ」「かしこきことなり」という評言となるのである。

『篁物語』の場合、「許允婦」の逸話とは意図を察すべき男女の位相や血縁関係は逆転した構造になっているが、『篁物語』のこの部分には、父親の意を察し、それを汲み取って適切な行動がとれる聡明さと深い人間性をもつ女性としての三の君の姿がある。そして、『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉の姿によってそれを読み取ることができるのである。

2. ^{すき}好色的要素への批判

『篁物語』において右大臣の意図を汲み取ることが婚礼の寄るにおける一連の出来事のなかで重大である。だが、三の君は諾々として父親の意図を汲み取るだけの存在ではないことが、篁の最初の夜離れの後に示される。篁は妹の魂に引きよせられ、夜離れをする。

夜離れの理由を問われ、三の君に事情を告白する。その時の三の君の態度は、決して自分の意思のない女性のそれではない。妹および妹の魂と篁の結びつきに許容的態度を示す賢さもあるが、同時に篁の精神的状況に対して批判を行なっている。

篁から妹との経緯を聞かされた三の君は篁と妹の結びつきを次のように評する。

妻、「いとあるべかしきことにて、あはれのことや。わがためにも、さらずおはせめ、わいてもこそは、むかし人は、心もかたちも、さものし給ければこそ、年をへて、え忘れがたくし給らめ。さる人を見給ひ¹けん、言ひ知らで見え奉るよ、後世いかならん。

あかずしてすぎける人の魂に生ける心を見せたまふらんあな、はづかし」との給に（p 36）

1 み侍

三の君は、結婚をしてもなお、妹の魂に領有されつづける篁に対して、「いとあるべかしきことにて、あはれのことや」と篁と妹の繋がりについて、「あはれ」という言葉を用い篁の執着に共感的態度を示した。その後、「わがためにも、さらずおはせめ」以下のような自分の存在と自分の思いを伝える。

「あるべかしきことにて」の部分は、諸注篁と妹の仲であるとして、「理想的なことだ」と解釈されている。『篁物語新講』のみ『源氏物語』「行幸」の「覚え高くやむごとなき殿上人・蔵人の頭・近衛の中少将・弁官など、人がら花やかにあるべかしき十余人つどひたまへば」を挙げ、「あるべかしきことにて」を「大変理想的な人でありましたから」と解釈するが、『篁物語』において人物の性質を語る時には、「のどかなりける人」「すなほなりける人」という「形容表現+人」という表現が用いられているので、ここは三の君の性質を示した表現方法ではない。やはりこの語は篁と妹の死んでもなお引き合う精神的結びつきを理想的だといい、それに対して

「あはれのことや」という三の君の反応を示しているものだと解釈するのが妥当であろう。

妻である三の君は妹と篁の結びつきを否定はしない。篁の心情に寄り添いながら、篁と妹の結びつきについて共感を示し、その上で改めて自分の心情を示すのである。

「わがためにも、さらずおはせめ」以下に自己の心情を示したように、夫の心の動きを察し、「わいてもこそは、むかし人は、心もかたちも、さものし給ければこそ、年をへて、え忘れがたくし給らめ」と妹への賛美を行ないながらも、「さる人を見給ひけんに、言ひ知らで見え奉るよ、後世いかならん」と現実世界で共に生きる存在として、自分の存在を印象付ける。なにも知らずに結婚した自分はどうなるのか。今、篁の口から聞かされたような、強い紐帯をもつ妹がいるのに、自分は結婚をし、身の置き所がない、と。「あな、はづかし」と嘆息し、その身の置き所のなさを率直に伝えることで、自分のもとに男を引き留めようとする。だが、それに対して篁は

男、「なにか、それは思しめす。かくては、はてはえ知しめさじ。御魂のあるやうも見るべく、こゝろみにさへ、なり給はぬ」とて

別れなばをのがさま／＼¹なりぬるとおどろかせねばあらじとぞ思

出でてまかりしを、引きとどめて、今日までさぶらはせたまふ。うるさしかし」言ひける。(p 36～p 37)

1 たま／＼

篁が魂を呼び起こす関係こそ素晴らしいのだといい、そもそも婚礼の夜出て行こうとした自分を引き留めたのはあなただ、と齟齬のあるまま物別れしてしまう。この齟齬の発生の根底には、妻である三の君が、いつまでも前の妻に執着しつづける男のことを批判した、と篁によって理解されていることがある。篁は、妻が男の執着を非難した、と取ったのだろう。

ここで、再び『世説』の世界に戻ってみる。許允婦のもとに夫を

引きとめたものは何か。許允婦が着物の裾をとって引きとめたからという物理的な反応ではない。妻の賢さである。

引きとめた妻に、夫は「婦に四徳あり。卿其幾あるや」と問う。醜さのために心を動かされることのない妻に対して破談にするつもりで、「理想的な婦人としてどれだけ立派なのだ」という皮肉を言ったというところであろう。それに対して妻は「新婦の乏しき所はただ容のみ。然して、士に百行あり、君に幾ありや。許云ふ皆備れり」と容貌以外は女性に必要なものは充たしているとまず答え、ついで夫に「君子として必要な百行の内備わっている数はいくつか」と問い返す。すべて、と答えた許允に対し、追いかぶせるように「夫れ百行は徳をもって首と為す。君は色を好んで徳を好まず。何ぞ皆備れりと謂ふや」と反論し、「徳を第一にしなければならない君子が、美人を好むなんていったい何事だ」と、許允の浮ついた心を厳しく非難する。その妻の非難の的確さに許允は恥じ、「逐に相敬重」する関係へと導かれる。許允と許允婦の円満な関係は、夫の好色な気持ちに対する妻の批判が、夫に衝撃を与えたことによってもたらされたものである。

『篁物語』の諍いの場面において『世説新語』〈許允婦〉にみられる「婦容」「好色」についての具体的な問答はない。そのため、一見〈許允婦〉の後半部は引用されず消去されてしまっているように見える。だが、二つの点から『世説新語』のこの部分が『篁物語』のなかに読み直されているといえるように思う。

この〈許允婦〉と『篁物語』を繋ぐ回路のひとつに、『本朝文粹』卷七「奉_二右大臣_一」があることは冒頭に述べたが、「奉_二右大臣_一」の中の文言によって、〈許允婦〉の婦徳・士行の問答が、『篁物語』に結びつけられたことには疑問を差し挟む余地はない。「奉_二右大臣_一」のなかで大臣の娘を次のようにいう。

傳承賢第十二娘、四徳無_レ双、六行不_レ闕
婦徳である四徳がすばらしく婦人の行いとして必要な六行の闕ける

ことがない人物であると称える。婦徳を備えた娘と君子とはいえない男の対比は、許允と許允婦の対比に重なる。

また『篁物語』では、婚礼の夜の話は、妻が夫を引きとめる話で終わっている。また、篁が部屋に留まった理由は書かれない。この部分は、出て行こうとした篁を三の君が捉えたからという物理的反応として理解され、三の君の機転として読まれている。三の君に対する篁の心理描写もなく、この部分だけを読むのであれば、三の君は単に機転の利く人物として造型がなされているにすぎない。だが、三日夜の後に篁が妹の魂に引き寄せられて夜離れをしたのち、再び右大臣家に現れて妹との経緯を述べ、そのことでの諍いの後、篁の心を支配しつづける妹に対しての三の君の言葉は、二重の意味を持つものになるだろう。

三の君との諍いの内容が、妹の魂に精神的に囚われ続けることの可否であるのは、先に述べたとおりだが、その後「夜離れ」を続ける男が、三の君を「いとよくなり出でければ、二なくもてかしづき奉」った、という記述がみられることから、『篁物語』には、男の好色を問題にした諍いと最終的に妻を大切にするという結末をみることが出来る。そして、この結末まで含めて『篁物語』を読むと『世説新語』当該部分の後半部と同じ展開になっているといえよう。

諍いの中にみられる三の君の言葉は、いつまでも妹に領有されつづける篁の心の美しさへの共感と共に、その反面にある好色的な性状に対して批判でもある。妻は「わいてもこそは、むかし人は、心もかたちも、さものし給ければこそ、年をへて、え忘れがたくし給らめ」と篁の心情を評価しつつも、心も容貌も劣るといふ劣等感も仄めかしている。そして、同時にこの言葉は、自分に対しての批判と男に対しての批判を行っている言葉なのではないだろうか。「後世いかならん」「あなはづかし」と畳みかける三の君の言葉は、一見篁への批判のようであるが、父の意図を汲んで、前の恋人に執着しつづけるような人と結婚してしまった自分の軽率さへの自己批判、そして同時になお妹の魂に領有されつづける男への批判が含まれて

いるのではないか。

その後の篁の行動は「若き頃はいとねんごろにはあらで、ほかに夜離れなどもしけり」というものである。ここから遡行して婚礼の夜留まったことを考えれば、すでに婚礼の夜の時点で、篁に夜離れする資質があったことが示されており、そしてその夜離れが妻によって終息させられることを期待されているといえる。〈許允婦〉においては、容色が欠けるといふ許允の批判に対し、許允婦はそのような許允の姿が、色を好む君子にあるまじき行為だとの批判を行って、才気をみせ自分の価値を男に認めさせる。『篁物語』の場合には、篁が妹に領有しつづけられることに対して、三の君は理解を示すことで篁に認められる。

篁の告白からみえる男の姿は、身体は現実生活に属しながら、精神的には妹の魂に領有され続けているものである。しかも夢現定かではないが、妹の魂を受け入れている。いうなれば、肉体的には現実の世界に属し、精神的には妹の魂の世界と現実の世界の間をさまよっている不安定な状況にある男が、右大臣に評価された才を現実世界のなかで生かす為には、男は精神的にも現実世界に帰ってこなければならぬ。

篁の前に現れた三の君は、父親の意を実現させるために存在している。しかし、それは単に父親の意を察するだけではなく、夫と魂との結びつきを知った後には、受容的な態度と共に、自立した意識を持ち、状況を改善したいという意欲をみせている。

結局は妻の受容的な態度と批判が「この男は、若き間は、いとねんごろにあはで、ほかに夜がれなどもしけり」という夫婦関係を造っていったと考えられる。ここに示される「夜離れ」は、男が妹の魂の世界に引き寄せられていることを示すのと共に、三の君が篁を現実世界に引き戻す為に必要な時間だったといえるのではないか。

「夜離れなども」とあるので、夜離れもあったが、足繁く通ったときもあったのであろう。栄達までの時間は、離れたり近づいたりし

ながら、妻の賢さによって、夫を現実世界に繋ぎとめていった時間でもあった。また婚礼の夜の齟齬を生んだ出来事から考えると、妻である三の君が、婚礼の夜に篁が差し出した「文巻」の意味を読み解く時間でもあったといえるだろう。男の好色的要素を批判しつつ、その性状の核をなす妹の魂への思いを受容したからこそ、篁を現実世界に繋ぎとめることが出来たのである。そして最終的には「二つなくもてかしづき奉る」と夫婦の関係が「遂相敬重」する関係に至ったのである。そのためには妻が篁への好色的要素への批判を契機として篁がその問題と向かい合う必要があったであろうし、妻による批判という要素は〈許允婦〉の逸話を用いて読むことでより明確になる。

3. 人物造型への試み

後半部に出てくる三の君の受容的な態度は、妹の魂に領有される篁の心を現実の社会に立ち戻らせる。それは、篁に対する妻の理解の深さによる。そのような三の君の造型の源泉にある許允婦の行動は許允の「好色」を非難するものである。篁の婚礼の夜の場面に「許允婦」の世界が引かれているということは、深層の部分で男の好色性を提示し、かつ批判しているといえる。『篁物語』の中には、許允婦にみられる問答は存在しない。むろん君子の「好色不好徳」と和文芸の中での「色好み」を同じ位相で論じることができない。だが、篁が妹のことを思いつづけるという、一方向へ向かう精神が色好みの一つの要素であることは間違いあるまい。とすると、三日夜の後、妹の霊屋らしきところに行き、妹の魂に引き寄せられたところから始まった男の夜離れは、篁が色好みまたは好色的な要素を持つ人間であったということを示すものなのだろう。妹に対して一途に思いつづける形の好色は、業平卒伝「体貌閑麗」の出典とされる『文選』巻19「登徒子好色賦」⁷にみられる好色と同質性をも

⁷渡辺秀夫氏（1991.1）「在原業平の卒伝の解釈」『平安文学と漢文世界』P 4

つかどうかという問題もでてくるが、この点については今後の課題としたい。

もう一点いっておきたい。『篁物語』の結末にみられる三の君の幸福は、本文だけで読む場合、不利な選択をした末子が最後には幸福になるという末子成功譚的な結末として読め、それで充分物語は完結している。だが、篁の婚姻の始まりに、好色を諫められたことが、幸福に繋がった「世説新語」〈許允婦〉の物語の引用を読むことで、篁への右大臣家による才学への承認と男の好^{すき}色的性質が強調されるのである。また、才学への承認によって、右大臣家の三の君との婚姻が円満に終ることは、身分が低かったため叶えられなかった妹との恋にも決着を迎えることでもある。親が后がねに考えていた娘も妹と同じく「かしづく娘」であり、篁への承認は、身分が低くても才さえあれば、そのような娘を迎えることが出来ることを証明している。妹との恋は、身分が低かったために許されなかったのだが、妹と同じく「かしづく娘」である三の君との結婚の許可と成功は、妹との出来事への悔恨を消し去るものであった。右大臣家へ婿取られるという形での篁への承認は、才学の承認がより深く読み取れ、才学の承認を経て生まれた三の君との関係からは、男の精神の不安定さと現実世界への回帰を促す妻の力が読み取れるのである。

この物語展開には中国文学にみられる「始窮後達」の型も取り込んでいるのだが、「後達」はまさに「かしづく娘」であった妻の批判によって達成されている。この「後達」は、身分が低かったために認められず「始窮」であった異母妹との恋をも「後達」と成すものであったといえる。

以上述べたように、『世説新語』「賢媛伝」〈許允婦〉を通して『篁物語』を読むことで篁の男の中に好色的性質がより明確に浮き出てくることには注意しておきたい。『伊勢物語』『平中物語』の男が、和歌で名を知られ、和文芸の人間の物語であるのに対して、篁

は『古今和歌集』で「風流」という評価を受けてはいるが、特に色好み性を強調されることはなく、漢文芸の世界の人間としての評価が中心である。その人物が物語の中心となり、その才学の承認と好色的性状の表現を同時に行っているという点においては、この物語の独自性がみられる。また、物語生成において、篁の本質を「風流」と評した『古今和歌集』収録歌が、歌がたりとして用いられることはないことも、この物語の独自性を示す現象であろう。「篁」の物語は、和歌によってその好色的性質があらわされるのではなく、漢文芸のテクストを物語のテクストに織り込むことによって好色性が示されているのである。このような方法からは、『篁物語』において、ある人物の造型を行おうとする、物語生成の試みを見ることができるといえる。

付記

本文は彰考館本「篁物語」を底本とする岩波古典文学大系本『篁物語・平中物語・浜松中納言物語』に従った。本文不詳の部分もあるので、アラビア数字で注をつけ、書陵部本の校異を引用本文の後にまとめて記した。引用本文のページ数は日本古典文学大系に従った。

参考文献

- 阿部俊子（1977）『歌物語とその周辺』再版、笠間書院
 池田弥三郎（1954）『現代語訳日本古典文学全集 更級日記 平中物語 篁物語 堤中納言物語』、河出書房
 石原昭平・根本敬三・津本信博（1977）『篁物語新講』、武蔵野書院
 遠藤嘉基（1964）『篁物語・平中物語・浜松中納言物語』岩波古典文学大系、岩波書店
 菊田茂男（1955）『新講 篁物語』、秋田大学国文研究室

- 小久保崇明（1970）『篁物語 校本及び総索引』風間索引叢刊、笠間書院
- 平野由紀子（1988）『小野篁集全釈』、笠間書院
- 平林文雄（1988）『小野篁集・篁物語』、和泉書院
- 宮田和一郎（1936）『新考篁物語』、爾保布廼園
- 宮田和一郎（1947）『王朝三日記新釈 篁日記・平中日記・成尋母日記』、建文社
- 目加田誠（1997 版）『世説新語』下（12 版） 新釈漢文大系、明治書院
- 山岸徳平（1959）『平中物語・篁日記・和泉式部日記』日本古典全書、朝日新聞社
- 渡辺秀夫著（1991）『平安朝文学と漢文世界』、勉誠社